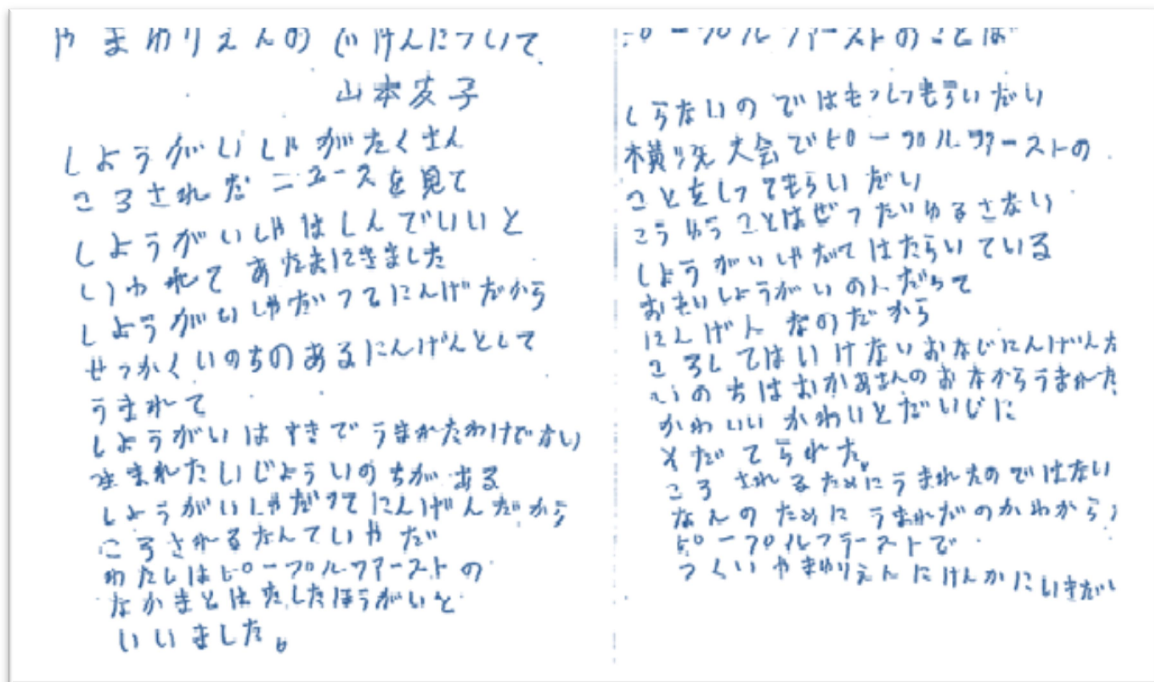


## 横浜で一緒に暮らしませんか。

誰もが存在することに価値がある、その社会の実現に向けて

～「すきで、しょうがいしゃにうまれたわけではない」に応えるなかまでありたい～

高山 和彦さん（社会福祉法人同愛会 理事長）



### 命の誕生という新たな始まり

事件を知った直後、二人のなかが綴っていました。「しょうがいしゃは、すきでうまれたわけでない、うまれたいじょういのちがある」（山本さん）。「すきで、しょうがいしゃとして、うまれたわけじゃない。ころされるために、うまれたわけじゃない」（中山さん）。この言葉をどのように受け止めたらよいのでしょうか。

「すきでうまれたわけでない」、さりげない会話にこのフレーズが差し込まれるとやはり双方が緊張します。当然です。障害という言葉は抽象的な概念ではありません。自由と平等を尊重しているとは言いがたい社会で、知的障害を生きてきた体験による

現実が浮き彫りにされた言葉だと思います。彼／彼女たちの意識の深層には、社会的に排除され差別された体験が記憶として沈積しています。心的外傷です。事件はトラウマ体験を引き出しました。

「この子がいてよかったという気持ちと、いなければよかったという気持ちがくっついて、離すことができない」、と重い障害のある星子さんと暮らし、障害者運動に関わってきた最首悟さんが語っていました。最首さんご自身が抱く星子さんへの揺らぎは、「すきで・・・」と語っていた山本さんと呼応するように思います。最首さんの揺らぎは、知的障害者が能力と進歩、効率を優先させる円錐体社会の

頂点に立つことのない絶望への抵抗がもたらすものだと思います。しかも、その最底辺面で非効率的な生き方をしている人たちの存在のあり様とは何かを問い続けている振動です。

山本さんは「うまれたいじょういのちがある」「いのちはおかあさんのおなかからうかれた。かわいい、かわいいとだいにそだてられた」、人間の命と誕生を見つめています。地球の生き物の全てが、38億年前に発生した細胞のDNAを祖先としています。人間という生き物も38億年という時間の流れの中における自然です。人間の誕生は父と母の存在が絶対条件です。しかも、親は子にゲノムに含むたった一つの細胞しか渡しません。子は双方から1セットの染色体（DNA）を受け継ぐだけです。受精後の胎児は体内で38億年の生命誌を辿って誕生します。私たち人間は20万年前に進化して誕生した生物種として、今もその営みが続いています。

子は常に一から始めなければなりません。が、私たちの誕生は単なる自然現象ではなく、人間に備わっている未来への可能性という希望と期待があります。今、この地上には70億回の誕生があり、どれ一つとっても同じ人間がいません。したがって、多くの人々はその奇跡ともいべき人間存在の始まりともいべき誕生を祝福されるのです。

「ころされるためにうまれたのではない」との山本さんの静かな叫びは、「なんのためにうまれたのかわからない」、と命を奪われた19名の仲間たちへの思いを重ねて私たちに問いかけています。

神奈川県が呼びかけた「ともに生きる社会『かな

がわ憲章』の実現は、この問いに応える営みから生まれと思います。そのためにも、私たちの存在が生命誌的な生き物としての価値があり、意味に気付くことが求められています。ミミズだって／オケラだって／アメンボだって／みんな生きているんだ／友だちなんだ。容疑者Uは遠い昔の記憶からこの歌を呼び出すようなことがあったのでしょうか。全ての始まりにとって障害の有無は関与しません。真っ青な空の色です。

容疑者Uは人間存在のほんとうの価値、誕生が新しい始まりだとの意味を理解することができませんでした。人間が存在する価値は、私が私らしくなっていく時間が尊重され、社会に参加する自由で平等な道が拓かれていくなかで輝きます。なぜなら、産業革命以降の世界が求めたことは、「より速く・より遠くに・より合理的に」という効率的な価値です。重い障害のある人たちは商品としての労働力価値がありません。世界は障害者を疎外し、差別してきました。彼はこの現実を見る努力を怠ったのです。「職員の生気に欠けた瞳」は容疑者Uの意識の投影でしかない。

事件が私たちに求めていることとは、容疑者の主張に惑わされることなく、人間が存在することを祝福する社会の実現です。山本さんの「すきで・・・」、最首さんの揺らぎは、私たちの内面に根付いている偏見や差別、無理解を超えていく命の営みによってのみ超えることができるのです。平坦で安易な近道はありません。

## 匿名のAさんに

「新しい始まり」という輝きや躍動感から疎外されてきた人たちが知的障害者です。被害者のなかに50年近い年月をやまゆり園で生活していた方がいたという。成人後の人生を「ソコだけ」で過ごした

のです。県の北極といわれていた地で。どのような人生の営みがあったのでしょうか。その検証があつて然るべきです。その検証なくして、やまゆり園の再建はありえません。匿名のAさん、貴方も「好き

で障害者に生まれたのではない」、とっていましたか。

Aさん。私たちは貴方の心の内面をなぞり、貴方の夢や希望を思い描いて、貴方がほんとうに願っていた生き方を貴方の仲間たちに届ける義務がある

と思っています。貴女が人生の大半を過ごした知的障害者の入所施設とは何であったのか。その存在価値は、意味を貴女は知っていたでしょうか。振り返ってみましょう。

## 施設退所の呪縛

今の社会では多様なニーズを求めている知的障害のある人たちに対して、人間の尊厳を守り幸福を追求していくための支援の体制が十分にできていません。したがって、生まれた街で育ち・学び・社会参加をしていくことが困難です。家庭や地域社会では支えることのできない人たちが入所施設をやむなく利用することになっています。

また、入所施設を利用した人たちのなかには、一生涯をその施設の中で過ごされる方もいます。が、ご自分の人生をそのような定めて納得しているのでしょうか。残念ながら、入所施設を出ていくことの支援が不足しています。街の中で自由に暮らしていくための依存先があまりにも少ないのが現状です。

何故、そのようなことになっているのでしょうか。

入所施設を利用した人たちの施設退所についての呪縛があるからです。「できないことが、できるようになったら」入所施設から出て、地域で生活するのだと施設職員や親が思い込んでいるからです。

箸を使って自分でご飯を食べることができない、入浴の時体を洗うことができない、トイレも促さないと失禁してしまう等、できないことを沢山出します。職員や親はその人のできないことを数えることは得意ですが、できる事を探すことが下手です。行政も私たちの仕事を「生活介護事業」と定め、常時介護の必要な人たちへの福祉サービスを提供するとしています。

## 施設入所の目的は何か

止まって考えてみましょう。知的障害者は「介護」を求めて生きているのでしょうか。国際障害者年「完全参加と平等」は、障害者の社会生活の保障・参加のための国際的連携と努力によって障害福祉の飛躍的な前進をつくりました。が、「生活介護」という障害福祉サービスは障害のある人の自由と平等の観点からも、憲法 13 条「幸福追求権」からも縁遠いというよりも「差別」的な呼称です。

知的障害者の入所施設が人間の幸福を追い求めることなく、日々の暮らしの営みを施設内で完結させる日課の中で、胸ときめく躍動感を抱くこともない時を積み重ねても、容疑者 U のような障害者は幸

せをつくることができないと断定し、自らの眼が生氣に欠いた労働に埋没することになるってしまいます。

このような入所施設の根本的な構造を残したままの再生プランは、容疑者 U が抱いた障害者差別、蔑視の観念を温存することになります。知的障害者の入所施設の存在意味、定義を不問にしたままでは、この凄惨な事件を乗り越えていくことはできません。

平成 4 年に開所した私たちの施設では「有目的・有期限」が運営原則です。入所する理由を相互に確認して、一生いる場所ではないことを利用者と約束

し合いました。また、施設を退所する条件は「貴方にとっての“じりつ”の支援の仕組みが家庭や地域にできたときです」と。私たちの存在理由は、入所利用者の“じりつ”の支援ができる環境条件を整えることです。したがって、入所施設とは施設利用者の障害の程度と生きる課題に応じた支援の仕組みを施設外に求め、創るための運動体である、と。ハコに人間を合わせるのではなく、その人にとっての必要なハコを創ることが私たちの仕事の意味です。やまゆり園の再建に欠けているのが、入所施設の定

義と運営の思想です。

このような運営をしてきましたから、160名以上の利用者が退所して私たちが運営するグループホーム（GH）を利用しています。現在の入所施設利用者平均年齢は32歳です。20数年間の開所時の平均年齢よりも若くなっています。毎年成人式をしています。行先が不安定な退所はありません。家族の方々も退所への不安がありません。「親亡き後の不安」はありません。順縁の幸せを大切にしたいと家族と話し合っています。

## 匿名のAさんの思い

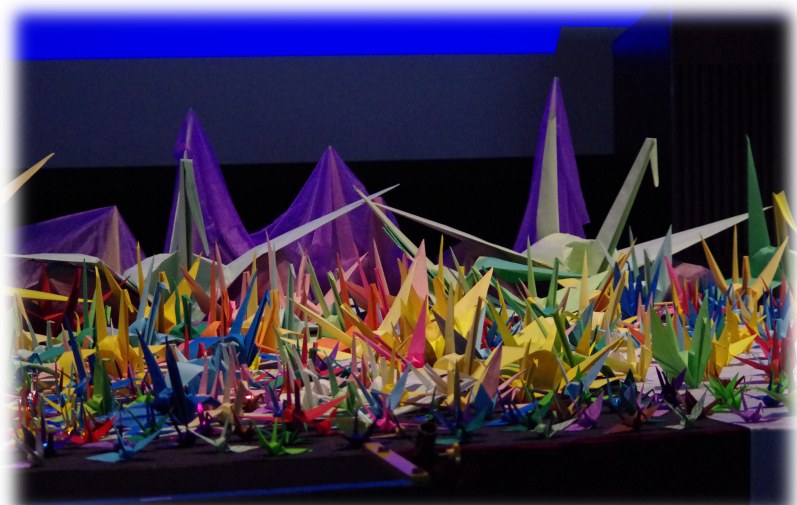
また、私たちの施設で利用者の退所後、安心したGHでの暮らしができるのは横浜市のGH制度があるからです。GHとは血縁を伴わない新たな共同体です。したがって、共に働き、暮らした仲間の看取りもおこない、見送りもします。冠婚葬祭を生きることが普通の暮らしです。

横浜の知的障害関連施設協議会がピープルファースト横浜の「障害のある横浜市民を横浜に迎える」要望に応じて、やまゆり園利用者の方々にGHやその他の利用の説明をおこない多様な選択肢を提供する取組を始めました。この取組の成否は、施設協議会だけではできません。県と横浜市、知的障害当事者、何よりもかながわ共同会とが再生プランを共有し、希望への展望を拓くこととなります。そのようなチームがつくられたとき、「ともに生きる社会『かながわ憲章』」の精神の実現の一步になります。

匿名のAさん。今、悩み、苦しんでいる人たちがいます。やまゆり園の支援スタッフです。貴女を支えて頂いた職員さんたちです。

思い切り伝えましょう。沈黙を破って、発信してください。やまゆり園の利用者が望んでいたことは何でしたか。貴方たちは何ができなかったのか、と自分を責めるのではなく、やまゆり園50年の来し方を振り返り、今求められていることは何か、何ができるかを考えてください。

やまゆり園利用者のために彼の地で終の棲家をつくることなく、生き方暮らし方の多様な選択肢を選べる再建プランを提起することが大切です。横浜の施設協議会の取組と一緒に参加しませんか。私たちは、待っています。



【ピープルファースト横浜大会で、知的に障害のある方が1,300人集まってやまゆり園の追悼をした写真。献花ではなく、折鶴を奉納】